



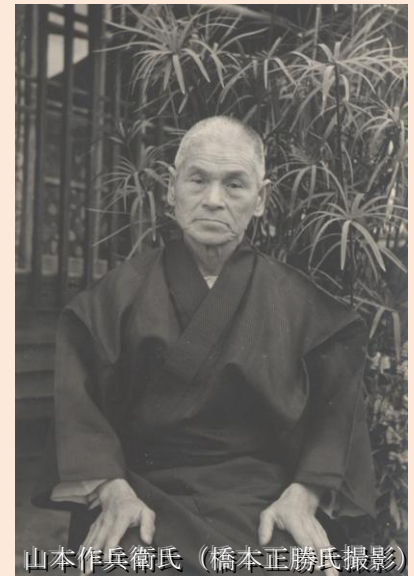
企画展 「ユネスコ世界記憶遺産 山本作兵衛 炭坑記録画展」

デジタル複製版

前期：2015年9月9日(水)～10月25日(日)



「ヤマの水害」 ©Yamamoto Family 田川市石炭・歴史博物館所蔵



山本作兵衛氏 (橋本正勝氏撮影)

山本作兵衛さんは、1892年(明治25年)現在の福岡県飯塚市で生まれ、その後田川市に移り住みました。7歳から父の仕事を手伝うようになり、63歳までの57年間、炭坑で働きました。

炭坑絵を描き始めたきっかけは、子孫に自分の生き様と炭坑の生活を伝えようという思いからでした。

山本作兵衛さんは、1984年(昭和59年)に亡くなりましたが、作兵衛さんが残した作品は、名もなく貧しくても、懸命に生きていくことの素晴らしさを教え、見る人に、人として生きることの意味を問い続けています。

こうして、山本作兵衛さんが残した絵と文章は、2011年(平成23年)5月25日に日本で初めて、ユネスコの「世界記憶遺産」に登録されました。



「入坑(母子)」 ©Yamamoto Family 田川市石炭・歴史博物館所蔵

炭坑と部落差別の問題はつながっている

(明治以降)

石炭産業の発展が、新しい被差別部落を生み、差別を再生産していった。

炭鉱の発展により被差別部落人口が増加した

被差別部落やその周辺に多くの炭鉱ができ、付属施設が増えると、そこで働く人たちのため、炭鉱住宅(炭住)が造られました。人が暮らすようになると、商店や共同浴場などができ、やがて炭鉱町に発展していききました。

その際、被差別部落が分断されたり、より条件の悪い場所に移住させられ、その数は増えていきました。さらに、土地を失い、経済的に困窮した炭坑の被差別部落の男女にとって、炭鉱以外に働く場所がない状況になっていきました。

また、炭鉱が発展するにつれ、仕事を求めて他の地域からたくさんの方がやってきました。被差別部落の人と結婚する人も多く、子どもが生まれ、新しい被差別部落ができ、その人口も増えていきました。



炭住では、厳しい身分制度があった近世より、制度がなくなったその後の時代のほうが、被差別部落数もその人口も増えていったんだ。被差別部落の歴史と炭鉱の歴史には、深いつながりがあることがわかったかな？ 身分差別と職業差別——この二つが重なりあい、からみあっているところに、炭住の差別の問題の特徴とむすかしさがあるんですよ。



明治時代の中頃、高知の農家の三男だった私のお祖父さんは、長男が後を継いだため、筑豊の炭坑で働くことになりました。一生懸命働き、少し蓄えもできたので、土地を手に入れて農業をしようと考えましたが、誰も土地を売ってくれませんでした。そこで同じ思いをしていた炭坑の仲間たちと近くの原野を開墾することにし、炭坑の仕事の合間のすべてを使って開墾しました。お祖父さん、私の父、そして私の三代かかかって、山間に3町歩(約9,000坪)の田んぼを持つことができましたが、気がついてみると、他所者であること、被差別部落の娘さんと結婚したことで、地元の人たちから差別されるようになっていきました。筑豊には私と同じような境遇の人がたくさんいます。



ある古老の話 (1975年の聞き取り調査より)

考える 人権 歴史の中から「差別」を問い直そう!

歴史を学び、確かな人権感覚を
いまなお強く残る、特定の地域や職業に対する差別意識。これは、歴史と社会が作り出した根拠のない偏見です。経済的な格差や職業に対する誤った認識、他所から移り住んだ人への警戒感や嫉妬心などが、差別の種をまき、差別する心を芽生えさせました。
みなさんは、ここまでのページで、炭産地域でどんなふうに差別意識が形づくられてきたかを学んだことでしょうか。「そっとしておけば差別はなくなる」「知らない人が増えれば差別は自然に消滅する」という考えがありますが、それは、差別を認め、差別が増えることを許すことにはなりません。地域の歴史を学び、その実際を知ることを通して、正しい知識とたしかな人権感覚を育みましょう。

田川地区社会同和教育担当者会制作「しあわせは みんなの願い」から

企画展関連事業のご案内 Part 1

講演会

と き: 9月27日(日)
13:30 から

と ころ: 福山市人権平和資料館

テーマ: 「炭坑と人権」

講 師: 田川市石炭・歴史博物館
館長 安蘇 龍生さん

企画展関連事業のご案内 Part 2

映画 「三たびの海峡」 上映

(1995年製作 2時間3分)

と き: 11月15日(日)

① 10:00 から
② 13:30 から

と ころ: 福山市人権平和資料館

原 作: 帚木 蓬生

出 演: 三国連太郎, 南野陽子, 永島敏行, 隆 大介, 白竜, 林 隆三 ほか

「ふくやまピース・ラボ」NEWS

ワークショップの様子

8月5日に広島市役所で開催された「ヒロシマ青少年平和の集い」に、全国から17団体、約190人の中高生が参加しました。福山市からもピース・ラボのメンバーが参加し、交流しました。

<あらすじ>

第二次大戦末期から現代までの時代を背景に、最初は強制されて、その後は自分の意思で玄界灘を三たび渡ったひとりの韓国人の男の半生を、その憎しみと愛に彩られた生きざまを描いた大河ロマン。戦時下と民族差別という悲惨で野蛮な状況と闘った人間の勇気、そしてその困難さを越えて愛しあう男と女の姿を重い感動とともに描きだします。